ゴーゴリの『外套』

菊池嘉人

《我々は皆、ゴーゴリの『外套』から出発した》とは、ドストエフスキーの言葉だとされているが、実はそうではないらしい。確かに、著作中にそのような記述はないようだし、発言と解釈しても、時と場所を明示しての引用にお目にかかったためしはない。もともとはツルゲーネフの発言だったのが、いつのまにかドストエフスキーのものにされてしまったというのが真相らしいが、(1) 私は詳しくは知らないし、それを追求するのが本稿の目的でもない。『外套』に限らず、有名な文学作品には手垢のついたレッテルや《神話》がつきものであり、しかもそれが実体に即したものであることの方が少ないと言えるだろう。そういうレッテルや《神話》を疑うのは当然の義務である。

冒頭に挙げたのは、『外套』にまとわりついた《神話》の最大のものの一つといえるものだ。一方、レッテルの中で最大のものといえば、言うまでもなくベリンスキーが貼りつけたものだろう。ゴーゴリの作品一般に適用した《涙を通しての笑い》は言うまでもなく、『外套』は虐げられた哀れな官吏に同情を惜しみなく注いだもの、というベリンスキーによって与えられたフィルターを通さずにこの作品を見るものは稀である。(このフィルター自体が一人歩きして、ベリンスキー自身の真意とはかけ離れた物になっているかどうかは、調べてみないと私には何とも言えないが。)

ウラジーミル・ナボコフの『ニコライ・ゴーゴリ』は、類書に親しんだことのない私にとってはそれ相応の知的刺激を与えてくれたゴーゴリ論ではあるが、『外套』の主人公バシマーチキンについて論じた箇所には納得しがたい部分がある。ナボコフはバシマーチキンを《人間的で痛ましい (human and pathetic) 》(2) と形容するのである。更に、《背景が単なる道化芝居 ("burlesque") でないのと同様に、彼は何かそれ以上のものである》(3) とも言う。私には、"pathetic" とは呼べても、あえて "human" と呼べるとは思えない。ドミトリー・チジェフスキーの言い方を借りれば、彼の充足している世界は余りに小さいので読者はそこに長くは留まれないほどなのである。一方、他の箇所では《幽霊》とか、《たまたま小官吏の装いを纏った、恐るべき深淵からの来訪者 (a visitor from some tragic depths who by chance happened to assume the disguise of a petty official)》(4) とか呼んでいる。やはり、"human" というより "ghost" といったほうが、バシマーチキンにはふさわしい。いささかこだわり過ぎかもしれないが、"human" などという言葉が紛れ込んでしまっているのは、ナボコフもベリンスキー的な評価から完全には自由でないことのあらわれのように思われてならない。

バシマーチキンは、同僚の自分よりもずっと若い官吏から馬鹿にされていて、日常的にかなりひどいからかいの対象となっている。普通、バシマーチキンはそれに対して何も言わず、黙々と仕事を続けているのだが、それでも耐えきれなくなると、《Оставьте меня, зачем вы меня обижаете?》(5) (ほっといてください、なんで私をいじめるんですか) と言う。

《 И что-то странное заключалось в словах и в голосе, с каким они были произнесены. В нем слышалось что-то такое преклоняющее на жалость, что один молодой человек, недавно определившийся, который, по примеру других, позволил было себе посмеяться над ним, вдруг остановился, как будто пронзенный, и с тех пор как будто все переменилось перед ним и показалось в другом виде. Какая-то неестественная сила оттолкнула его от товарищей, с которыми он познакомился, приняв их за приличных, светских людей. И долго потом, среди самых веселых минут, представлялся ему низенький чиновник с лысинкою на лбу, с своими проникающими словами: 《 Оставьте меня, зачем вы меня обижаете?》 — и в этих проникающих словах звенели другие слова: 《Я брат твой》. И закрывал себя рукою бедный молодой человек, и много раз содрогался он потом на веку своем, видя, как много в человеке бесчеловечья, как много скрыто свирепой грубости в утонченной, образованной светскости, и, боже! даже в том человеке, которого свет признает благородным и честным... 》(6)

(そしてこの言葉とそれが発せられた声の調子には何か妙なものがこもっていた。そこには何かあわれみを催させるものが聞こえ、最近ここに就職した若者で他の連中にならってバシマーチキンを嘲ってみていたのが、はっとしたように突然立ちすくんでしまい、それ以来、この若者の目の前では全てが変わってしまって違った姿で現れたかのようであった。何か不思議な力が彼を、知り合って礼儀正しくて上品な人たちと思っていた仲間たちから遠ざけてしまった。それからずっと、とても楽しい時を過ごしている最中に背の低い額のはげ上がった役人が目の前に浮かんで、「ほっといてください、なんで私をいじめるんですか」と、しみいるような言葉を発するのだった。そしてこの、しみいるような言葉には、「私は君の兄弟なんですよ」という別の言葉が響いていた。そして哀れな若者は片手で顔を覆い、それからの一生、人間の中にはなんと多くの非人間的なものがあるか、洗練された教養ある上流紳士の生活様式の中に、そして、おお神よ！世間が気高くて非のうち所のないと認めている人間にさえ、どれだけ多くの凶暴なものが隠されているかを見て何度となく身震いすることになったのだ。)

普通、このくだりをもって、社会への抗議が主題であると解されているようだ。しかし

哀れさは感じられるかもしれないが、バシマーチキンから深い人間的なものが感じられるかというと、そうは思えない。

この点で示唆に富むと思われるのは、チジェフスキーの『外套』論[7]である。チジェフスキーによれば、バシマーチキンの《Я брат твой》という言葉に同意しなかったといって、特別に高慢だということにはならない。社会への抗議が主題であれば、ゴーゴリ自身、小官吏生活の経験があることでもあり、主人公を読者の十全な共感を得られるよう造形できた筈だ、ということになる。第一、本当に人間的なのは、バシマーチキンよりも、彼の言葉によって目から鱗が落ちた《молодой человек》の方ではないか。先に引用した箇所にゴーゴリの思想が現れているとは言えても、それがこの作品の中心テーマとは言えない。以上がチジェフスキーの『外套』論から私にとって必要と思われる部分をつまみ食いしての雑駁な要約である。

これで最大のレッテルを剝がすことができると思うのだが、もう一つ重要なことは、主人公バシマーチキンの官位である。彼の官位は、вечный титулярный советник — 万年名義参事官（九等官）とされており、語り手も、さんざん作家たちからあざけられてきた官位だと述べているが、ロナルド・ヒングリーの『19世紀ロシアの作家と社会』によれば、作家たちの間ではこの官位が《一番コミカルだということになって》[8]おり、これが出てくるだけで《読者は快い緊張感を覚え、どんなどたばた騒ぎが演ぜられることだろうと待ち受ける》[9]ほどであったという。これ一つ取ってみてもゴーゴリが、読者に滑稽な話を期待させこそすれ、これから聞くも涙語るも涙のお話を始めます、皆さんどうぞハンカチのご用意をというトーンで作品を始めてはいないということが、分かろうというものだ。

語り口は、冒頭部分の書き出しからして一直線ではない。《В департаменте...》[10]と始めても、決してすぐには本題には入らない。しかし、どこの《департамент》かは言わない方がいいだろう、なにせ、当節のお役人ほど怒りっぽい人種もいないのおらず、なにかというと侮辱されたと感じるのだから・・・という具合である。更には、現に噂によれば、さるкапикан-исправник は・・・と、自分の職業が軽んじられていると憤慨した警察署長、そして、この人物が投書に添えていたという小説らしきものにほぼ１０ページ毎に登場する、時に酔っぱらっているкапитан-исправник という具合に、マトリョーシカのようにといってもいいのではないかと思えるほどの形で脱線し始める。結局、だから特定せずに“ある局”とだけしておこう、として本筋に戻るのは、十数行を隔ててからのことである。主人公のБашмачкин という姓、Акакиｊという名前の由来についての叙述のナンセンスさについては、繰り返し論じられてきており、私はそれに何物をも付け加えることかで

きない。ただ、もっともらしいように語られながら実際はナンセンスなその由来は挿入的である。誕生の場面は取って付けたようであり、主人公の少年時代、青年時代は語られることはなく、本質的には、最初から今の部署についている風采のあがらない小官吏として創り出されたキャラクターであるとは言えよう。主人公の容貌描写には、たたみかけるようにнесколько... -атという形が繰り返され、《Что ж делать! виноват петербургский климат》(11)という、それ自体としてはほとんど例外的に実質的情報を担った箇所にまでこのリズムの残響が感じられるように思うが、或いはそれは、ロシア人にはわかる名前の音の響きの面白さが感知できないことと表裏一体の私の錯覚なのかもしれない。従って、ゴーゴリの作品における音韻の重要性は疑いえないが、それを論じることは私の手に余ることは明らかなので、深入りは避けることにする。

バシマーチキンの日常生活は、しがない小官吏のそれとしても、やはり奇妙なものだ。もちろん、職務に熱心で、その熱意が相応に報いられていたら名義参事官 титулярный советник ではなく、国事参事官 статский советник にさえなれたろうという程度ならそう問題にはならない。だが、清書という仕事に愛情をもっていてそこに快適な満ち足りた世界を見出していたのはともかく、仕事中に自分のお気に入りの文字にたどりつくと、《気もそぞろになり、にやりとしたり、めくばせしたり、唇で加勢したりするので、彼のペンが書く文字が顔の表情から全て読み取れるように思えるほどだった》(12)というに到っては、そろそろ常軌を逸したものを感じ始めたとしても無理からぬことではなかろうか。バシマーチキンには清書という仕事以外には何も関心を持たない。衣服には全く無頓着であったことに加えて、《通りを歩いていて、窓からありとあらゆるごみが投げ捨てられるまさにその瞬間に、その窓の下に居合わせるという特技を持っていたので、いつも帽子の上に西瓜やメロンの皮とか、そういった屑をのっけていた》。(13)若い同僚が通りの様子をよく眺めていることと対照された描写も行われている。

《 Но Акакий Акакиевич если и глядел на что, то видел на всем свои чистые, ровным почерком выписанные строки, и только разве если, неизвестно откуда взявшись, лошадиная морда помещалась ему на плечо и напускала ноздрями целый ветер в щеку, тогда только замечал он, что он не на середине строки, а скорее на средине улицы.》(14) (しかし、アカーキー・アカーキエヴィチは、もし何かを眺めているとしたら、それが何であれ、自分が綺麗で大きさの揃った筆跡で書いた文字の行をそこに見ているのであって、どこからともなく馬の鼻面が現れて彼の肩に乗っかり、頬に鼻息を吹き掛けでもしないかぎり、自分が行の真ん中ではなく、通りの真ん中にいるのだということに気付かないありさまだった。)

リアルに小官吏の悲惨な生活を描こうとしたなら、普通こういう描写はしないだろう。

さらに、住居に戻ってからもバシマーチキンはこの姿勢を変えはしない。《家に帰ると、すぐにテーブルについて、すばやく自分のスープをすすり、玉葱つきの牛肉を一切れ食べるが、全然味に注意を払わず、蝿だろうがなんだろうが、その時たまたまくっついたものと一緒に食べてしまうのであった。胃がふくらみだしたとわかると、テーブルを離れてインク壺を取り出し、家に持ち込んだ書類を清書するのだった。もしたまたまそういう書類がない時には、自分を満足させるためにわざわざ自分用に清書する》。(15) こういう描写を読んで、主人公が "human"だという印象を受ける人がいるのだろうか。

《Даже в те часы, когда совершенно потухает петербургское серое небо и весь чиновный народ наелся и отобедал, кто как мог, сообразно с получаемым жалованьем и собственной прихотью, — когда все уже отдохнуло после департаментского скрыпенья перьями, беготни, своих и чужих необходимых занятий и всего того, что задает себе добровольно, больше даже, чем нужно, неугомонный человек, — когда чиновники спешат предать наслаждению оставшееся время : кто побойчее, несется в театр; кто на улицу, определяя его на рассматриванье кое-каких шляпенок; кто на вечер — истратить его в комплиментах какой-нибудь смазливой девушке, звезде небольшого чиновного круга; кто, и это случается чаще всего, идет просто к своему брату и четвертый или третий этаж, в две небольшие комнаты с передней или кухней и кое-какими модными претензиями, лампой или иной вещицей, стоившей многих пожертвований, отказов от обедов, гуляний, — словом, даже в то время, когда все чиновники рассеиваются по маленьким квартиркам своих приятелей поиграть в штурмовой вист, прихлебывая чай из стаканов с копеечными сухарями, затягиваясь дымом из длинных чубуков, рассказывая во время сдачи какую-нибудь сплетню, занесшуются из высшего общества, от которого никогда и ни в каком состоянии не может отказаться русский человек, или даже, когда не о чем говорить, пересказывая вечный анекдот о коменданте, которому пришли сказать, что подрублен хвост у лошади Фальконетова монумента, — словом, даже тогда, когда все стремится развлечься, — Акакий Акакиевич не предавался никакому развлечению.》(16)

(ペテルブルグの灰色の空がすっかり暗くなって、お役人連中が受け取った給料と気まぐれに応じて腹一杯食べ終える頃、役所のペンのきしみ、あちこちへの奔走、自分や他人にとって欠かせない仕事、せわしない人間が自発的に必要以上に引き受けた仕事などもろもろが済んで、あらゆるものが一息つく頃、お役人たちが残りの時間を楽しみにあてよう

と急ぎ、元気な者は劇場へ飛んでいき、ある者は女性の帽子を眺めることに時間を費やそうと決めて街に繰り出し、ある者は夜会で小さな役人の世界ではスターである、愛くるしい女の子にお世辞を言うことに使おうとし、またある者は、これが一番多いケースなのだが、四階や三階にある客間か台所つきで流行に応じて昼食や散歩を断って多くの犠牲を払い手にいれたランプその他の調度品などを揃えた小さな部屋が二つといういわゆる兄弟の住居になんとなく向かう、つまり、お役人なら誰でも自分の友人の小さな住宅にそれぞれ散らばって、ホイストをやりながら安物のクラッカーをかじりコップの紅茶をちびりちびり飲み、長いパイプで煙をくゆらせたりして、カードを配る間にロシア人ならいついかなる状態であろうとも退けることができない上流社会からの噂話を語り、何も話すことがない時でさえファルコネの銅像の馬の尻尾が切り落とされたという報告を受けた警備司令官のおさだまりのアネクドートを繰り返したりしている頃、つまり、誰もが気晴らしに専念している頃、アカーキー・アカーキエヴィチは、いかなる気晴らしにもふけらないのだった。）

皆がさまざまなやり方で時間をつぶしているその時にもバシマーチキンは気晴らしにふけったりしないという所までたどりつくまでに、参照したテキストでは２８行、引用の形でも１９行を通過しなければならない。気の利いた『外套』論なら引用していて当たり前の箇所であろうと思う。最初私は、これらさまざまに繰り広げられた絵模様が、最終的にはバシマーチキンが気晴らしにふけらないという一点に収斂して消えていってしまうという風に解釈していたのだが、だんだんに、両者は互いに拮抗しているのではないか、或いはひょっとすると否定的に扱われるべきはバシマーチキンの方ではないか、というふうに思えてきた。自分でも評価が揺れ動いているのが感じられて、最近の受け取り方の方が正しいと言い切る自身はない。しかし、バシマーチキンにいわばブラックホール的なものが感じられる、とはいってもいいのではないかという気はする。このような登場人物、及びその描き方を何と呼べばいいのだろうか。自分で用語を考え出し、きっちりと定義付けをするのが本来有るべき姿だとは思うが、今のところその能力はない。したがって、安直のそしりは免れまいが、既製品の用語を当てはめさせてもらうことにする。大雑把な捉え方かもしれないが、一言でいえば、グロテスクである。といっても、言うまでもないことかもしれないがミハイール・バフチーンの有名な『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』で論じられている哄笑に満ちた陽気なグロテスクではなくて、あの中で批判的に紹介されていた、ヴォルフガング・カイザーのグロテスク論によるものである。もとよりゴーゴリは中世・ルネサンスの作家ではなくカイザーの著作でも扱われている。しかし、カイザーは『外套』について、《道徳的な意図があまりにも歴然としている

ので、グロテスクなものが展開する余地はない》[17]とまで言い切っている。これは余りにも皮相な見方ではないか。カイザーもベリンスキー的な色眼鏡で見ていたのだろうか。カイザーのいう、《不気味な、疎外された、非人間的なもの》[18]が主要なものであるグロテスク世界という概念は『外套』でも、ある程度であれ有効性を持っていると思う。

バシマーチキンは自分の《小さな世界》に充分満足していて平和な日々を送っていたのだが、外套を新調しなければならなくなって、それが崩れ、ついには外套のために破滅してしまう。新しい外套を身につけることによって、突発的に街娼に興味を示すという、それまでに見せなかった動物的な反応を見せる。これをゴーゴリが肯定的に見ているとは思えない。やはり、チジェフスキーの見解に則って、外套は悪魔の誘惑と考えるべきなのかもしれない。

私に本来与えられた課題は、バシマーチキンが長年着古した外套の修繕を仕立屋に頼まなければならない頃合になったと感じるまでの部分が、どういう具合に作品全体の縮図になっているかを明らかにすることだった筈だが、力量不足でいっこうにうまくいかなかった。主人公がどういう存在なのか、彼が充足していた世界はどんなものなのか、を示し、その平和が崩壊する兆しが見え始めた、ということで作品全体の縮図となっているのではないか、と締め括ることが、当初からのせめてもの目論見だったが、それさえも成功しているか、自信がない。諸賢の批判を待ちたいと思う。

〈註〉

(1) 川端香男里『薔薇と十字架』青土社 1981年 20 頁

(2),(3) V.Nabokov, *Nikolay Gogol* ,Weidenfeld and Nicolson, 1973, p.142

(4) ibid. p.143

(5),(6) Н.В.Гоголь, Собрание сочинений в семи томах , Москва, 1977, том 3, стр. 118.

(7) 参照テキストは、*Dostoevsky and Gogol:Texts and Criticism*,Ardis,1979 所収のもの。

(8),(9) ヒングリー『19世紀ロシアの作家と社会』川端香男里訳 中公文庫 1984 年 231 頁

(10),(11) Н.В.Гоголь, Собрание сочинений в семи томах , Москва , 1977, том 3, стр. 116

(12),(13) Там же, стр.119.

(14) Там же, стр.119-120.

(15) Там же, стр.120

(16) Там же, стр.120

(17)カイザー『グロテスクなもの』竹内豊治訳　法政大学出版局 1968 年　170 頁

(18)バフチーン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』
川端香男里訳　せりか書房 1980 年　47 頁